

5月6日 復活節第5主日

使 9:26～31 Iヨハ 3:18～24 ヨハ 15:1～8

1. ヨハ

v.1 「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。」

w.3-4 「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていない。」

v.8 「あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。」

ヨハネ福音書には、最後の晩餐における感謝のいけにえの制定の場面が記述されていませんが、今朝のテキストは正にそれを思い起こさせるものです。ミサの奉献文で「これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて、罪の赦しとなる永遠の契約の血」と唱えられる、その“まことのぶどうの木”がイエス・キリストであるという宣言で、語り始められているからです。

このまことのぶどうの木につながっているなら、豊かに実を結ぶように父なる神が手入れをなさる(刈り込んでくださる/フランシスコ会訳)。それは洗礼の秘跡を受けた信者は、キリストの福音によって「既に清くされている」(v.3 フランシスコ会訳/13:10 参照)からです。

言うまでもなく、ここで「わたしの話した言葉」(v.3)「わたしの言葉」(v.7)とは、イエスの語られたあの言葉この言葉を指しているのではなくて、原始教会の伝承としての“伝えられた教え”(παράδοσις/1コリ11:2、IIテサ2:15, 3:6)のことです。それはカトリック教会が“聖伝”と呼んでいるもので、成人の入信に際しては求道期の教育で、また幼児洗礼を受けた子供たちのためにはカテケージスで、本来“組織的かつ体系的に”教導される筈のもので(カトリック教会のカテキズム 序論5)が、実際には指導者等の無能によってほとんど全くスキップされて来ました。自ら福音を学ぶことをせずに、ただの善意だけでカテケージスの奉仕が出来ると、多くの司祭と奉仕者たちが勘違いしたことに原因があります。

私たちがミサで、ことばの典礼と感謝の典礼を通してお会いするキリストは、過去の物語りの中の思い出のイエスではなくて、神の右の座に着いておられる天上のキリストであり、「わたしの話した言葉」(v.3)「わたしの言葉」(v.7)は、そのような意味で理解されねばなりません。そうでないと、教会が“それによって、父が栄光をお受けになる”ような実を結ぶことは不可能だからです。

2. 使

v.28 「それで、パウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、……」

パウロは回心後、それほど日時が経たないうちに、使徒(たち)を訪ねてエルサレムに上りました。ガラ1:18の「三年後」は足かけ三年のことで、実際には一年少々後のことであつたと思われます。その目的はケ

ファ(ペトロ)から、原始教会の“伝えられた教え”(παράδοσις)を受けるためであったと考えられます。

彼はそれ以前におそらくダマスコにおいて、当時この地方に広がっていた使徒たちの伝承に関しての知識をすでにかなり得ていたと思われますが、それでも使徒自身(エルサレム教会を代表するペトロ)から“正統な伝承”を受けることが絶対に必要であったということを、聖書は語っているのです。

教会が聖伝と聖書を啓示伝達の器(神を見るための鏡のようなもの/啓示憲章 7)と呼んでいるのは、このような“使徒たちに遡る伝承”のことを指して言っているのであって、ローマ・カトリック教会は「司教の正当な継承を通して、特にローマ教皇自身の配慮によって」これを大切に保っていますが、「ただし、かれらは信仰の神的遺産に属するような新しい公の啓示を受けない」(教会憲章 25、啓示憲章 4)と、明快に説明しています。

この“伝えられた教え”(παράδοσις)が、事実上ほとんど忘れられている現代の諸地方の教会に向かって、教皇ベネディクト XVI は 2012 年 10 月 11 日に始まり、2013 年 11 月 24 日に終わる「信仰年」の開催を告示されました。多くの小教区の現場で、司祭たちが“伝えられた教え”(παράδοσις)に無知な“歌を忘れたカナリア”状態であるとしても、現代の一般信者は最早自分で聖伝と聖書を学び得ないほど“教養なき者”ではないことを、教皇はよくご存じだからです。

3. 1ヨハ

v.23 「その掟とは、神の子イエス・キリストの名を信じ、……」

もし人がこれまでその意味を理解することなく、ぼんやりと聞き過ごしていたとしたら、「神の子イエス・キリストの名を信じる」とは、神がイエスの名において与えた啓示を信じることであり、すなわち“伝えられた教え”(παράδοσις)を受け入れて救われることであると知っていただきたい。

「その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」(ヨハ 1:12)

「わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」(使 4:12)

「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」(フィリ 2:9)

この“伝えられた教え”(παράδοσις)を、共同体の中で皆が固く守ること(II テサ 2:15、I コリ 11:2)が、新約聖書が語る「互いに愛し合うこと」(v.23)、つまり同士の団結であることを理解しようではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

5月13日 復活節第6主日

使 10:25-26,34-48 |ヨハ 4:7~10 ヨハ 15:9~17

1. ヨハ

v.13 「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

私たちがこのイエスの言葉を、直ちに次の使徒の証言と結びつけて理解するのでないなら、私たちは福音を何も理解していないこととなります。「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ロマ5:8)

福音は、自然のままの人間にとっては“新しいこと”(イザ42:9, 43:19, 48:6)であって、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったこと」(Iコリ2:9)だからです。肉の人(Iコリ3:1-3)にとっては「それは愚かなことであり、理解できない」(Iコリ2:14)ということ、私たちは軽視してはなりません。

キリスト教を現代人に分かりやすく説明する、あるいは自分が納得しようとして、それを“肉に属する考え方”(ロマ8:5)、“人の知恵に教えられた言葉”(Iコリ2:13)に置き換えてしまう誤りを、私たちはしばしば犯して来ました。私の個人的意見では、カトリック教会の主日のミサの“公式祈願/試用”に、その危惧を大いに感じています。

「わたしがあなたがたを愛したように」(v.12)を、「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださった」(ロマ5:8)という意味で理解するためには、信仰が必要なのです。洗礼の秘跡によって、「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」(IIコリ4:6)

この「宝」(マタ13:44)、「これほど大きな救い」(ヘブ2:3)を共有する信者たちの同士の団結を念頭に置いて、「互いに愛し合いなさい」(v.12)というキリストの掟が与えられました。

2. Iヨハ

v.10 「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

“使徒たちが伝えたこと”、すなわち教会に託された聖伝と聖書によって、キリストの福音を学ぶことをしなければ、人は神の愛、キリストの愛を知ることにも理解することも出来ません。「肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊にしたがって歩む者は、霊に属することを考える」(ロマ8:5)からです。

福音を学ぶことをせず、“神は愛”だから“愛は神”なのだとなんげか納得してしまうような、そんな安易なキリスト教理解が人々の間に広がっています。聖書の中のあれこれの言葉の意味を考えるのに、国語辞典や漢和辞典で調べるといようなことが平気で行われたりします。“聖書を自分でよく読む”“聖書そのものに耳を傾ける”ということが大切なのです。聖書の中の言葉を、その前後関係から切り離してしまうと、それ

はもはや“神のことば”ではなくなってしまいます。国語辞典が説明する“愛”ではなくて、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ4:25)御子イエス・キリストの“愛”が、ただそれだけが新約聖書では証言されているのです。「その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。」(v.9)

3. 使

vv.44-47 「ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。……そこでペトロは、“わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか”と言った。」

聖書はその全巻に亘って、聖霊が降るところには神の力が働くという理解を語っています(ルカ1:35、使1:8参照)。聖霊とは神から独立した別の力ではなくて、神御自身であり、教会に聖伝と聖書を通して託された福音に耳を傾ける人々には、復活された天上のキリストが聖霊を通して訪れてくださるということが起こるのです。

神がコルネリウスたち異邦人に聖霊を送って、彼らをユダヤ人と一緒に神の国を受け継ぐ者、同じ約束にあずかる者(エフェ3:6)にしてくださいました。このように、教会の主体は人間ではなくて、神であることを感謝しましょう。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」(ヨハ15:16) 「あなたがたの救われたのは恵みによるのです。」(エフェ2:5) そして、私たちも使徒パウロと共に宣言しようではありませんか。「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません」(ガラ6:14)と。 ハレルヤ、アーメン。

5月20日 主の昇天

使 1:1~11 エフェ 4:1~13 マコ 16:15~20

1. マコ

vv.15-16 「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。」

御子イエス・キリストが“ただ一度成し遂げられた永遠の贖い”(ヘブ 7:27, 9:12)が、全世界に宣べ伝えられて信じる者すべてに救いをもたらす(ロマ 1:16)というのは、後の時代の人間が考え出した新しい活動ではありません。そうではなくて、これは「天に上げられ、神の右の座に着かれた」(v.19)現在のキリストの御業であるということ、現代のキリスト者は理解しなければなりません。

主の昇天は、決してキリストが“去って行かれた”のではなくて、今や過去の歴史の中に閉じこめられることなく自由に、「至るところで」(v.20)その“秘められた計画”(Iコリ 2:1、エフェ 3:6)を、教会と共にいて(マタ 28:20)お進めになる方、「今おられ、かつておられ、やがて来られる」(黙 1:4)救い主となられたということです。

ですから今朝の集会祈願で私たちは次のように祈りました。「主の昇天に、わたしたちの未来の姿が示されています。キリストに結ばれるわたしたちをあなたのもとに導き、ともに永遠のいのちに入らせてください。」

どうか皆さまが愚かな“ただのカトリックシンパ(護教家)”になることがありませんように。聖書という昔の書物に書かれたイエスの教えにヒントを得て、現代人の必要に応える独自の福音を追求することが、キリスト教という宗教の使命だと考えている人が多いのです。

古代の信仰定式に、*dextra Dei ubique est* (神の右の座はどこにでも) というのがあって、昇天のキリストは今や全世界のどこでも支配し、自らその御業を継続しておられると、教会は宣言して来ました。そしてその御業の中心は、私たちの教会なのです。

2. エフェ

vv.4-6 「体(教会)は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望(将来の神の国)にあずかるようにと招かれているのと同じです。主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ。すべてのものの父である神は唯一であって、……」

私たちの教会は、“ただ一度成し遂げられたキリストの贖い”の果実であって、昇天のキリスト御自身の御業の継続、その御業が現在行われている場所なのです(1:22-23 参照)。ですから、本来キリスト者の希望は一つである筈なのですが、実際には現代の教会の信者のほとんどが“秘められた計画”(1:8-14)に無知であって、このためミサにおける“キリストの現存”を実感をもって理解していません。

「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。」(1:17-18)

昇天のキリストは、代々の時代の教会に指導者や奉仕者をお立てになりますが、それは私たちが皆「神の子に対する信仰と知識において一つになる」(v.13)ためです。先月日本語訳が発売された教皇ベネディクト XVI の使徒的勧告“主のことば”は、キリスト信者の聖書教育の項で、「すべてのキリスト信者、とくにカテキスタは適切な養成を受けることが必要です」(p.131)と述べ、聖なる叙階の志願者については、「聖書を神学養成の魂としなければなりません」(p.137)と語っています。

3. 使

v.8 「あなたがたは …… 、わたしの証人となる。」

キリストが弟子たちから離れて天に上げられたことは、決してイエスが地上の教会を留守にされたものではありませんでした。そうではなくて、今や昇天のキリストは全世界のどこでも支配し、特に教会をその御業の中心とされたのであり、使徒とその後継者はこの“現在のキリスト”の証人とされたということなのです。代々の時代の教会を支配し、その御業を進めておられるのは神の右の座に着いておられるキリスト御自身でありますから、教会憲章 21 は次のように宣言しました。「したがって、大祭司である主イエス・キリストは、司祭たちに補佐されている司教の中に、信する者たちの間に現存する。事実、神である父の右にすわっている主は、自分の司教たちの間にいないことは(あり得)ない。」

そのようなわけで、私たちは今朝の拝領祈願で心一つにして祈ります。「天に上げられたキリストに結ばれて、いつも永遠の国を目指すことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。」

アーメン、ハレルヤ。

5月27日 聖霊降臨の主日

使 2:1~11 ガラ 5:16~25 ヨハ 15:26-27, 16:12-15

1. 使

vv.4,7,11 「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した。……人々は驚き怪しんで言った。……彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞くとは。」

カトリック教会のカテキズムは、その第2編の第1部を“秘跡による救いの営み”という表題で、次のように書き始めています。「聖霊降臨の日、聖霊を注がれた教会は世に姿を現しました。聖霊が与えられたことで、『神秘の分配』の新しい時代が始まります。それは、教会の時代であり、…キリストは…諸秘跡を通して働かれるのです。」

プロテスタントの神学者であるカール・バルトは、1934年当時の彼の講演の中でローマ・カトリック教会を念頭に置いて、「教会とは、神の御意と真理と恵みとが、人間の処理と管理に委ねられているようなものではない」と述べました。第二バチカン公会議の公文書である“教会憲章”を学んでいる私たちは、現代のカトリック教会が決してそのような主張をしていないことを知っています。さらに続けてバルトは、「教会においてこそ、神の真理は、…ただその秘義(秘跡)においてだけ、ただ信仰に対してだけ、己を我々に知らしめる永遠の主体である」と語りました。そうなのです。イエス・キリストの受難と復活を通して成し遂げられた神の偉大な業を私たちが聞き、理解し、信じる信仰は、ただ聖霊の助けによって与えられるのであり(カトリック教会のカテキズム 683)、洗礼の秘跡は、私たちが「水と霊によって…上から生まれる」(ヨハ 3:3-7/フランシスコ会訳)ために、教会に委ねられたキリスト御自身の御業なのです。

宗教改革者マルティン・ルターはその有名な“小教理問答書”の中で、「わたしは、自分の理性や能力によっては、わたしの主イエス・キリストを信じることも、御許に来ることも出来ないと信じます。けれども聖霊は、福音を通してわたしを召し、その賜物をもってわたしを照らし、まことの信仰のうちに清め、支えてくださいました。それは聖霊が、この地上の全教会を召し集め、照らし、清め、そしてイエス・キリストにある、真の、一つの信仰のうちに支えられるとおりです」と述べました。

私たち一同は今朝、この“聖霊降臨の神秘”を祝ってミサをささげているのです(今朝の集会祈願)。

2. ヨハ

教会がすべての民を主の弟子とし、またその人々を聖化し、治め、そのようにして…世の終わりまで日々絶えず牧し続けて行くという、キリストから使徒たちに委ねられた神的使命のために、「使徒たちは、聖職位階制度によって組織されたこの社会(教会)の中に後継者を定めるよう配慮した」と、教会憲章は説明しています(19,20)。この使徒たちとその後継者の証し(15:27)を用いて、聖霊は信じる人々に罪の赦し

と永遠の命を与え、天に蓄えられている復活の希望(16:13、コロ1:5,23)を理解させてくださるのです。

そして、「この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗い(洗礼)を通して実現したのです。」(テト3:5) 私たちは聖霊を自分の目で見たり説明したり出来る訳ではありません。「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆その通りである。」(3:8) しかし福音を信じて洗礼を受け、聖霊で証印を押されたのであれば、「この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証」(エフェ1:14)なのです。

3. ガラ

v.18 「しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。」

v.25 「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。」

キリストの霊に導かれているとは、私たちがキリストの贖いの恵みによって律法から解放されたということなのですが(ロマ7:6、8:2 参照)、使徒たちの証言においてはあまりにも明白なこの事実が、歴史の教会においてはしばしば、単なる人間の(信仰とは何の関係もない)道徳や清らかな生活に置き換えられて理解されて来ました。私たちカトリックの子らの中で、偶像礼拝や魔術(v.20)を行う人などいるはずもありませんが、それで霊の導きに従っていることになる訳ではありません。またあなたが寛容、親切、善意(v.22)に心がけていれば、それが霊の導きに従っていることに換算されるという訳でもありません。

「キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。」(ロマ8:9)

今日の聖書の学びの冒頭で取り上げた“カトリック教会のカテキズム 1076”に、私たちは喜びと感謝をもって耳を傾けようではありませんか。「(聖霊降臨の日以来)それは教会の時代であり、…キリストはご自分の教会の典礼を通してその救いの業を現し、現在化し、分け与えられるのです。…すなわち、諸秘跡を通して働かれるのです。」

私たちすべての信者は今朝心を新たにして、ミサの祭儀に「充実した、意識的な、行動的な参加」(典礼憲章14)をささげようではありませんか。なぜならこの典礼に対して、「(すべての)キリスト者は、洗礼の秘跡によって権利と義務を持っている」(ミサ典礼書の総則3)のですから。

アーメン、ハレルヤ。